

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

March 2019 vol.29



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「^{てん}と^{せん}——、いろ、かたち 島根の美術室」

造形要素から読み解く島根の文化財

企画展「猪熊弦一郎展『いのくまさん』」

虜になる—「いのくまさん」の描くモダンでかわいい世界

報告「衣装取り扱い研修 アイロンの実技実習」

基本的な仕事をコツコツと、美しく。

29



狩野秀頼《神馬図絵馬》 室町時代 1569年(永禄12)寄進 邑南町・賀茂神社 重要文化財 展示期間:4月20日~5月20日



図1の拡大図



図2

図1.《文殊菩薩像》南北朝時代 14世紀 出雲市・鰐淵寺 島根県指定文化財 展示期間:5月22日～6月24日

図2. 雲谷派《楼閣山水図襖》(部分) 江戸時代前期 17世紀 益田市・萬福寺 島根県指定文化財 展示期間:4月20日～5月20日

造形要素から読み解く島根の文化財

今回の展覧会では、絵を見て考える際の糸口として〈点と線〉〈かたち〉〈視点〉〈光と影〉〈いろ〉といった造形を成り立たせる基本的な要素に注目する。このようなコンセプトは、2018年1月から2月にかけて松江の島根県立美術館で開催された「みんなの美術室」展をもとにしているが、当館ではそこに独自のアレンジを加え、島根の古い歴史や文化を物語る「文化財」も出品作品の中に組み込んだ。

以下では出品作品の中から重要文化財や島根県指定文化財に指定されている作品を、造形要素という観点から読み解いてみたい。

表紙の作品では、2匹の馬が縄で地面の杭に繋がれている。向かって右の馬は頭を上へ上げて前足を跳ね上げているが、左の馬は頭を下に下げ、後ろ足を跳ね上げている。このような2匹の〈かたち〉の左右非対称性は、画面に「安定感」というより「躍動感」や「力強さ」を与えている。次に馬の〈いろ〉に注目すれば、黒と白のコントラストをなしていることに気がつく。古くより日乞いの白馬と雨乞いの黒馬をともに奉納し、天を鎮め、五穀豊穡を祈念するという絵馬の伝統があった。本作でも、白と黒を一对にすることは「晴れと雨とのバランスの良さ」を

意味していた。また、16世紀から17世紀初頭にかけては、戦国の争乱の中で軍馬の需要が増していた時代であり、馬を画題とする絵は「武のシンボル」であった。

なお本作は、戦国期に石見国と安芸国を治めた武将、高橋氏一族の「就光」が、同時期の狩野派の代表的な絵師、狩野秀頼に描かせ、今の賀茂神社(邑南町)へ奉納したものである。

次に、図1を見てみよう。獅子の上に座る人が描かれている。その人の顔の周りには、金色の線によって、円の〈かたち〉を成す〈光〉が描かれており、この人が神仏の類であることが示されている。右手には剣をもち、左手には経巻をもち、顔は若々しい。このような姿かたちは、「智慧」(物事を正しく認識し、判断する能力のこと。煩惱を消すことができる)のシンボル、「文殊菩薩」を意味する。文殊菩薩は剣によって煩惱を引き裂き、経巻によって正しい認識・判断をもたらす。獅子は、百獣の王である。獅子がほえて、百獣を恐れさせるように、智慧は人々の迷いを打ち砕く。このように剣と経巻と獅子は、「文殊菩薩」(智慧)であることの「しるし」である。

なお、本作を所蔵する鰐淵寺は、古来より出雲国での仏教の中心的な聖地であり、

地域の仏教文化を今に伝えている。

最後に、図2を見てみよう。これは襖に描かれた大画面の水墨山水図で、全部で20面のうち、今回は前期と後期で4面ずつ展示する。この絵には、墨の濃淡だけで〈光と影〉が表され、山の立体感や空間の奥行きが生み出されている。それによって、見る人にまるで自分が壮大な山水の中にいるような感覚を与えさせることができる。また、険しい岩山や、家屋の輪郭線をたどるまっすぐな〈線〉などの表現は、室町時代に中国に渡った画僧、雪舟の画風を受け継いだものである。

ちなみに本作は萬福寺(益田市)の旧襖絵であり、寺伝によると、雪舟が作庭したと伝わる庭園をのぞめる部屋に、はめこまれていたらしい。

ここまで見てきたように、〈いろ〉〈かたち〉〈光と影〉などの造形を成り立たせる要素から、作品を見る機会としていただきたい。

「猪熊弦一郎展『いのくまさん』」

2019年7月13日(土)～9月1日(日)

休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企
画
展



A



B



C

A. 題名不明 1987年

B. マドモアゼルM 1940年

C. 顔、犬、鳥、1991年

作品はいずれも丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵
©The MIMOCA Foundation

虜になる —「いのくまさん」の描くモダンでかわいい世界

こどもの ころから

えが すきだった いのくまさん

おもしろい えを

いっぱい かいた

この書き出しで始まる『いのくまさん』(小学館発行)は、洋画家・猪熊弦一郎(1902-1993)の芸術世界を子どもから大人まで、幅広い世代にわかりやすく紹介した絵本である。詩人・谷川俊太郎の綴る言葉を通じて、猪熊が生涯大切に描いてきた「顔」「猫」「鳥」といった主題の面白さ、さらに作品の「色」「形」が織りなす多彩な魅力が、頁からあふれんばかりに紹介されている。本展は、この絵本の世界観をもとに、香川県の丸亀市猪熊弦一郎現代美術館から多くの作品をお借りして、猪熊弦一郎の芸術を一望しようとするものである。

猪熊弦一郎は、香川県高松市に生まれ、東京美術学校(現在の東京藝術大学)に進学し、藤島武二教室で西洋画を学んだ。はじめは帝展(帝国美術展覧会)を舞台に活躍していたが、1936年に小磯良平らと新制作派協会(現在の新制作協会)を結成。純粋に芸術を志す若い美術家たちのリーダー的役割を担う。その後東

京、パリ、ニューヨーク、ハワイと拠点を移しながら独自の画風を追求し、多くの作品を生み出した。また、猪熊は芸術が一部の人のみに開かれたものではなく、日常生活の中にこそその美しさや楽しさがあるべきだと考え、壁画や緞帳、包装紙やポスターなどのテキスタイルデザインや、雑誌の挿絵や本の装丁画なども数多く手がけた。なかでも広く一般に知られているのが、三越の包装紙「華ひらく」のデザインだろう。他にも『小説新潮』の表紙絵を40年間担当したことや、JR上野駅中央コンコースの壁画《自由》の制作を担ったことでも知られている。

猪熊の作品の魅力をもっとわかりやすく、端的に伝えらしたら、「モダン」そして「かわいい」という言葉が当てはまる。例えば猪熊は無類の猫好きで一時期1ダースも猫を飼っていたが、作品には様々な猫たちが登場する。彼らは人間に媚びることなく自然体の姿であり、画家の目を通してデフォルメされたり、特徴だけを捉えてさらりと描かれている。その絵はユーモラスでかわいく、見飽きることがない(図A)。また、90年にわたる猪熊の生涯のうち、年代によって作風が大きく変わるのも、みどころのひとつだろう。人物画などを主に描いていた具象時代から、渡米後は抽象的な形態へと移行するが、初期

の人物画にも強く印象に残る作品がある。《マドモアゼルM》(図B)は、第二次世界大戦下のパリで、激しい空襲にみまわれるさなかに描かれた作品である。このマドレーヌという名のハンガリー人女性とは、妻が通っていたフランス語教室で知り合い、モデルになってもらった。当時の猪熊は、マティスに感化され、自分の画風について悩んでいた。しかし、この絵を描くことで何かを掴みかけていたのだろう、友人の藤田嗣治の帰国の勧めにも応じず、ぎりぎりまでフランスに残った。猪熊の覚悟の気持ちも伝わってくるような、強い吸引力のある作品である。また、1988年、長らく自分を支えてくれた妻に先立たれると、その面影を探すように、たくさんの「顔」を画面に描き続ける。《顔、犬、鳥》(図C)は、晩年に描かれた作品で、顔のほかには犬と鳥が登場する。違う種類、別の時間軸で存在するものが、実はひとつのつながりをもって同じ次元に存在すること、その無限の形を表しているようにもとれる。情熱が生み出したエネルギーの熱さと、自由な発想が吐き出す優しい呼吸。その両方を感じながら、この展覧会を楽しんでいただきたい。

(左近充直美 当館専門学芸員)

基本的な仕事をコツコツと、美しく。

開館以来「ファッション」を活動の柱の一つと位置付けている石見美術館では、ディオールやパレンシアといったすでに亡くなったデザイナーの衣装作品のみならず、現在活躍しているアーティストが制作した最新の作品も展示する。平成27年の展覧会「森英恵 仕事とスタイル」、29年の「COSMIC WONDER 充溢する光」、30年の「THERIACA 服のかたち／体のかたち」などがそうだった。こうした展覧会において展示作業の最後に取り組むのが、衣装作品のアイロンがけである。収蔵作品にアイロンを当てることはめったにないのであるが、一緒に展覧会をつくるアーティストからお借りした作品に、アーティスト本人からリクエストがあれば、かけることがある。

確かに、シワ一つで衣装の表情、印象は大きく変わる。シワが衣装の構造にかかわる大問題となることもある。だからもちろん、シワはないほうがいい。とはいえわれわれ学芸員には、その専門的スキルがあるわけではないので、いつも冷や汗をかきながら、おっかなびっくり取り組むはめになる。衣装には極薄手のチュールや、特殊なインクでプリントされた布地、紙など、通常の日常着には用いられないような素材が散見される。だからといって、そうした衣装に出くわすたびに手が止まっていたのでは仕事にならない。

こうした状況への反省から、プロに改めて教えを乞うべく、昨年11月1日に「衣装取り扱い研修」として、アイロンの実習を行った。講師には、ファッションデザイナー、森英恵さんのオートクチュール・アトリエから、森さんのアシスタントである藤平昌代さんにお越しいただいた。藤平さんは、平素はお客様とデザイナーである森英恵さん、そしてアトリエ所属の制作スタッフ、三者の間を絶え間なく行き来し、双方の要望や提案を的確かつスムーズに伝える役割を担っている。針やハサミ、アイロンを手にして仕事する機会も

多く、アイロンの技術の高さには定評がある方だ。実習当日は、仕事着である白衣を着用し、指導にあたってくださった。実習に参加したのは石見美術館の学芸スタッフをはじめ、ワークショップなどで我々を補助してくれるボランティアスタッフ、そして、当館同様に衣装作品を所蔵している美術館・博物館の学芸員、衣装を研究対象としている服装史の研究者など、のべ20名ほどとなった。この事業には、萩・石見空港の利用促進という目的もあったので、講師の藤平さんはじめ、参加いただいた学芸員や研究者の方々はみな関東圏からお越しいただいた。

実習は、参加者に一般的なシャツ一枚と、自分でアイロンをかけることはあきらめている「特殊な服」を持参してもらい、前者を通じて基本を、後者を通じて応用的技術の習得を目指すカリキュラムとした。「特殊な服」の中にはスパンコールのビーズ刺しゅうが施されたカットソー、襟や袖が複雑なつくりのブラウスなどが含まれ、使われている素材も違えば伸びの感じも違う、一癖も二癖も

あるものが揃っていた。藤平さんの指導は明快で、どんな素材でもまずは素材ごとに適切な温度にアイロンを設定すること、アイロンをかけたい部位に応じて、使うアイロン台の種類や部位を変えること、一気に広い面をかけようとするのではなく少しずつ確実にシワの数を減らしてゆくことなど、いずれも対象と素材をよく見て、それに応じた基本的な動作を着実に重ねてゆくということであった。筆者は基本動作として紹介された「手アイロン」について印象深く覚えている。アイロンをいきなり当てるのではなく、かけたい場所を先に手で撫でて布地を均すこの一手間が、アイロンをかけたことで新しいシワができるのを防ぐとのことであった。

プロの仕事を目の当たりにして見えてきたのは、基本的な仕事を根気強く丁寧にやり続けられるか否かが、プロと素人の分かれ道なのかもしれない、ということだった。

(廣田理紗 当館主任学芸員)



実習風景